

# 加古川流域の河川敷利用と水辺空間の研究

稲田 悦子

キーワード：河川敷・水辺空間・レクリエーション

## 1. はじめに

加古川市は図1のように、兵庫県南部の播磨地方の東部に位置し、東は三木市・加古郡稲美町・明石市・加古郡播磨町、西は高砂市・姫路市、北は加西市・小野市に接し、南は播磨灘に面している。大部分は平坦な地形で、播磨平野の中心部に位置する。交通網と平野の関係から、人口・商業・工業ともその比重は南部に偏っている。

このような加古川市の中心を流れる「加古川」は、図2のように丹波山地の北端に近い兵庫県氷上郡青垣町の粟鹿山に源を発し、篠山川・杉原川・野間川・東条川・万願寺川・美嚢川などの支流を合わせ、加古川市と高砂市の境界を流下して播磨灘に注ぐ、県下最大の1級河川である。

加古川市のシンボルともいえるべき「母なる川—加古川」は、高水敷に大変恵まれている。加古川市は最近神戸市などのベッドタウンとして発展し、人口増加が激しい。それに伴い、身近なレクリエーション施設が必要となってくる。加古川高水敷は、屋外であるため天候の良し悪しに左右されるものの、スペースがあり施設も整備しやすく、幅広い利用ができるという好条件を備えている。そこで加古川市は、1973年より河川敷整備を開始した。

本研究は、加古川河川敷整備の現状を踏まえ、市民による河川敷利用状況を統計資料やアンケート調査（1999年1月6日に実施、50グループの回答を得た）の結果をもとに把握し、他の地域の水辺空間も参考にしながら、加古川河川敷の今後の展望を考察すること

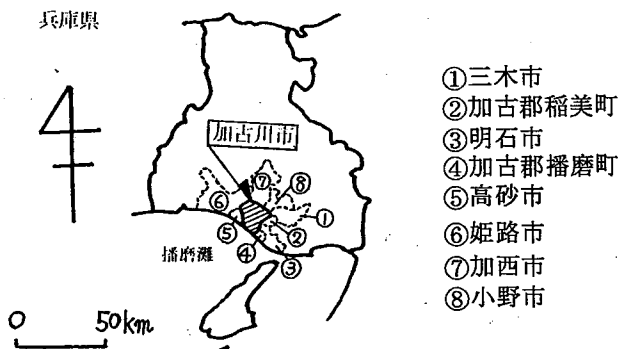


図1 兵庫県における加古川市の位置

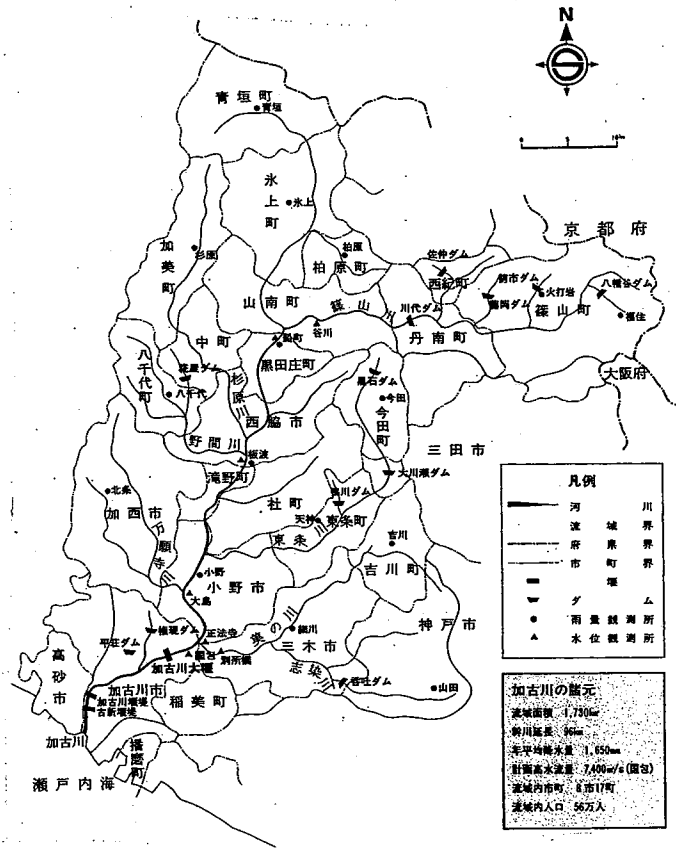


図2 加古川概要図

を目的とする。

## 2. 加古川河川敷整備計画

今日、都市化によってオープンスペースや公園緑地が減少し、子どもたちの遊ぶ空間や市民の憩いの場が失われている。そこで加古川河川敷を整備するに当たっては、広大な自然空間、身近に自然に触れ得る場としての機能が期待されている。加古川市は、河川敷を6つのブロックゾーン（「浜辺漁つりゾーン」「親水河原ゾーン」「市民健康ゾーン」「水と緑のシンボルゾーン」「四季の自然散策ゾーン」「加古川ゲートゾーン」）に、さらにそれらを12のサブゾーン（“河口海づりひろば”“集いのひろば”“親水ひろば”“健康ひろば”“都心河畔ひろば”“出会いのひろば”“歴史と自然のひろば”“運動ひろば”“野草花のひろば”“大堰修景ひろば”“加古川グリーントレイル”“水と緑のゲートひろば”）に分けて整備することとした。1999年1月現在、12のサブゾーンのうち5つのサブゾーンの整備が完了し、市民に利用されている。

一方、上記のレクリエーション施設の他にも河川敷の利用価値はある。1995年1月の“阪神・淡路大震災”では、東西間の道路が寸断され、災害復旧活動に重大な支障が生じた。そこで今後そのような事態が起こった場合に、円滑な緊急用物資の輸送や、沿川地域の避難者救援活動が行えるように、「緊急用河川敷道路」の整備を2000年の完成を目指して進めている。この道路は本格的なマラソンコースとしても利用でき、生涯学習の場としての機能が期待されている。さらに水害時における水防活動や復旧工事の拠点、ヘリポート基地としての機能を持つ「加古川防災ステーション」も1999年に完成する予定である。このように加古川河川敷はさまざまな利用価値を見出すことができる。

### 3. 加古川河川敷利用の現状

河川敷のレクリエーション施設の利用状況について、まず加古川市がまとめた“施設・地区・月別利用状況”の統計資料を参考にする。それによると、河川敷は屋外施設であるため、気候的に過ごしやすい春・秋は利用者数は増加し、過ごしにくい冬は利用者数は減少している。11月の利用者数が全体的に多く見られるが、これはこの月は祝日が多く自由になる時間が多いからであると考えられる。また、施設が整っているテニスコートやソフトボール場・陸上競技場の利用は他と比べて多い。そして、一般的に広く市民が興味を持ってやっていたり、特に力を入れて練習する人がいる“テニス・ソフトボール・ゲートボール”は利用者が多く見られる。

表1 加古川河川敷における利用目的と利用回数についてのアンケート結果

	散歩	休憩	趣味	運動	施設利用の運動	休日余暇	子どもの遊び
年1-2回	0	0	1	0	0	6	3
月1-2回	0	0	1	0	5	2	6
月3-4回	1	0	0	0	2	3	2
週2-3回	5	0	3	0	0	0	0
週4-5回	1	7	1	1	0	0	0
毎日	3	0	0	3	0	0	0

(複数回答あり)

出所：アンケート調査より

表2 加古川河川敷における年齢別利用回数についてのアンケート結果

	小学生以下	中・高生	～20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上
年1-2回	21	0	0	6	6	0	0
月1-2回	23	4	21	8	3	1	2
月3-4回	0	0	0	12	0	0	0
週2-3回	0	1	1	1	2	0	17
週4-5回	0	0	0	9	6	4	12
毎日	0	0	0	0	0	0	1

出所：アンケート調査より

次に筆者が河川敷利用者に対しておこなったアンケート調査の結果を、表1・表2にまとめた。

表から読み取れることを以下に述べる。

「散歩」は60歳代以上の利用者が多く、定期的に利用されるため、利用回数も多くなっている。「休憩」は車利用によるサラリーマンの勤務途中の休憩が圧倒的に多く、彼らも日常的に利用していることが分かる。

「趣味」や「運動」も散歩や休憩には及ばないものの、60歳代以上の高齢者による“グランドゴルフ”や若い世代による“ローラースケート”などの定期的利用が表れており、利用年齢の幅が広い。

「施設利用の運動」は、主に“テニス”や“サッカー”・“ソフトボール”などの利用であるが、利用年齢が中・高生～30歳代に限られる。そのため学校や仕事などの影響もあり、月に1-4回の定期的な利用にならざるを得ない。

「休日余暇」については20～30歳代を中心とする月3-4回～年1-2回の利用が最も多く見られる。この世代が好むレクリエーションは主に遊園地やショッピングなどがあげられ、河川敷のレクリエーション的な利用価値は低いと考えられる。しかし、このペースでの利用が見られるのは、気晴らしに外でゆっくりとバーベキューなどを楽しんだり、軽い運動がしたいという思いがあったり、短時間のうちに遊べる場所がある、ということが理由であると考えられる。

最後に「子どもの遊び」で利用しているのは、小学生以下の子どもたちとその親の年齢層である30歳代の親子連れが一番多く見られる。利用回数で月1-2回が最も多いのは、コンピュータゲームの普及により子どもたちがあまり外で遊ばなくなり、親の仕事休みに外で安全に元気よく遊ぶ場所として、河川敷を選んだことが原因の一つであると考えられる。そして最近の経済不況が利用価値を高めているのか、河川敷はお金がかからず短時間ででも利用可能であるため、利用回数は増加している。

アンケートの質問項目の中の、「利用して気づいたこと・困ったこと」に対する回答としては、“犬のふんが多い”ことや“トイレの利用マナーが悪い”“トイレトペーパーがない”など、衛生面に関する回答が多く見られた。

#### 4. 加古川河川敷における課題点

加古川河川敷は、あくまでそこで生息する動物と施設を利用する利用者のためのものである。利用して初めて改善すべき点に気づくことも多々ある。河川敷整備は、計画どおりに完成すれば終わりなのではなく、整備後が出発点である。どのように利用されていて、それに対してどう維持・管理していくべきかが大切である。“島根県津和野町津和野川”を参考にすると、津和野川はデザインに携わった者が、実際にその物・空間ができあがるまで、さらには人々に利用されている間もずっと関わり続けることで、質の高い空間づくりが可能になると考え、責任を負い続けているという。

例えば加古川河川敷の場合の改善すべき点と思われるところは、前述のとおり高齢者の利用が多いが、河川敷周辺の道路は交通量が多く、危険である。それにもかかわらず歩道などへの配慮が少ない。利用者のことを一番に考えた維持・管理・改善を行い、誰もが快

適に利用できるよう、利用者にもマナーの改善を求めるべきである。市と市民が連携を取り合って初めてよりすばらしい河川敷がうまれるのである。

## 5. おわりに

本研究で「加古川河川敷」について研究し、加古川を知ることにより、以前は何の特徴もないと感じていた加古川市に筆者は誇りを持つことができるようになった。すばらしいものを秘め、たくさんの魅力を持った「母なる川ー加古川」の良さを最大限に生かし、加古川市といえば「加古川の快適な河川敷」というイメージを持つことができるような、そして市民の誰もが誇れるような「加古川」になるといいと考える。

## 参考文献

- 加古川市都市計画部公園緑地課（1986）：『加古川河川敷緑地整備基本計画報告書』
- 加古川市都市計画部公園緑地課（1997）：『加古川河川敷施設・地区・月別利用状況』